

著書紹介 相澤正夫 編 『現代日本語の動態研究』

著者	相澤 正夫
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	4
号	3
ページ	241-242
発行年	2014-02
URL	http://doi.org/10.15084/00000760

相澤正夫 編

『現代日本語の動態研究』

2013年10月 おうふう A5判 262ページ 2,500円+税

相澤 正夫



1. 編集の経緯

書名が端的に示すとおり、「現代日本語」の「動態」に関わる多彩な「研究」の成果を、12編の論文としてまとめた論文集である。国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」（基幹型，リーダー：相澤正夫）の最初の成果物として刊行した。このプロジェクトは、4年前の2009年秋に、次のような構想を掲げて発足し、メンバーと対象領域を拡充しながら現在も継続している。

- ・戦後60年余（20世紀後半から21世紀初頭）の現代日本語，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性を，従来とは違った多角的なアプローチによって解明する。
- ・変異から変化への動態を的確に捉えるため，各種コーパス等の新規データを最大限に活用するとともに，対象に適合した新たな調査・分析手法の開発をはかる。併せて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。
- ・この共同研究により，例えば，語彙論的研究（体系・構造研究）と社会言語学的研究（運用・変異研究）の融合が促進され，変化して止まない現代日本語の姿を多角的・総合的にとらえるための研究基盤が確立される。

現代日本語の動態を的確に捉えるための試みであれば，どんなアプローチをとってもよい，むしろ，従来とは違った多角的なアプローチを積極的に試してみよう，そういった姿勢をメンバー間で共有しながら調査研究を進めてきた。取り上げる対象は，時間的変化，空間的変異，社会的変異のいずれに関する事象であってもよい。様々な言語形式の変異の実態，変化の方向性を解明するばかりでなく，背後にある日本語の使い手の言語意識，言語使用意識を探り出すことも，重要なテーマとして含めることとした。

2. 構成の観点

分析の「対象」と「手法」のどちらに重点があるかによって，次のように全体を大きく2部で構成し，さらにそれぞれを内容に即して二つに分けた。

第1部 動態研究の実際 —分析対象の側面から—

〈語・慣用句〉

- ・動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存（相澤正夫）
- ・外来語動名詞「チェック」の基本語化
—通時の新聞コーパス調査と意識調査の結果から—（金愛蘭）
- ・慣用句“気がおけない”の「誤用」について（新野直哉）

〈文法・表現〉

- ・サ変動詞の五段活用化・上一段活用化の現状（松田謙次郎）
- ・新聞データ（朝日『聞蔵』）に見る「なく中止形」の動向（金澤裕之）
- ・“道理に合わない”授受表現の使用と動態
—愛知県岡崎市での経年調査および最近の全国調査から—（尾崎喜光）

第2部 動態研究の基盤 —データと分析手法の側面から—

〈コーパス調査〉

- ・探索的データ解析による言語変化研究
—蛇行箱型図によるS字カーブの発見—（石井正彦）
- ・現代日本語における外来語表記のゆれ（小椋秀樹）
- ・分かりにくい医療用語の類型と語の性質（田中牧郎）

〈対人調査〉

- ・方言と共通語に対する意識からみた話者の類型
—地域の分類と年代による違い—（田中ゆかり・前田忠彦）
- ・「とびはね音調」はどのように受けとめられているか
—2012年全国聞き取りアンケート調査から—（田中ゆかり）
- ・NHKアナウンサーのアクセントの現在 —複合動詞を中心に—（塩田雄大）

3. 今後に向けて

従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓するためには、近接した領域で類似の言語現象を研究していながら、一堂に会して議論をする機会の少なかった様々な背景をもつ研究者に、情報交換や相互啓発の「場」を提供することが不可欠である。この本は、そのような「場」から生まれた第一段階の成果と位置づけられるものであり、「現代語動態研究」の「構築」を進めていくための「足場」として、広く活用されることを願うものである。

相澤 正夫（あいざわ・まさお）

国立国語研究所時空間変異研究系教授。文学修士（言語学）（東京大学）。国立国語研究所研究開発部門長を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『外来語研究の新展開』（共編著、おうふう、2012）、「分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き」（共編著、ぎょうせい、2007）、「ケーススタディ日本語の語彙」（共編著、おうふう、1989）、「外国語から外来語へ—言語・社会への定着過程を探る—」（『日本語研究の12章』、明治書院、2010）。

社会活動：日本語学会評議員、日本音声学会評議員、NHKアクセント辞典改訂専門委員。